

# 美術科教育：子どもの支援のあり方

事例とエピソード 追悼 上田佳世子の実践

小 倉 隆

キーワード： 教育 子ども 造形・図画工作活動 支援 事例

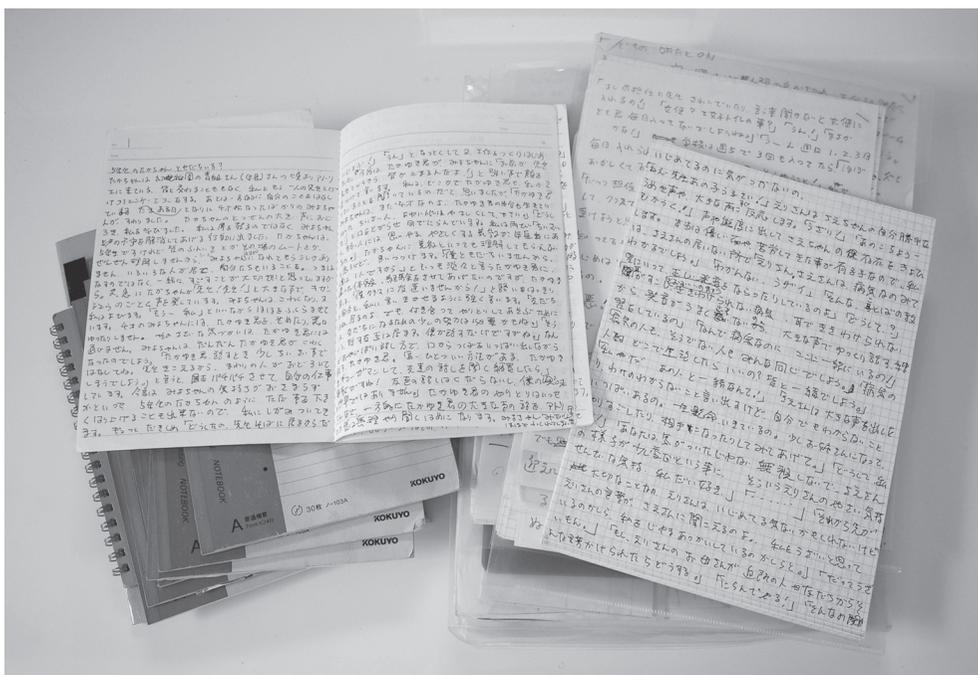
## 1. はじめに

教科教育の活動では、まず指導者の教科の専門知識が求められるが、幼児・小学生の教育現場では、教育活動を進める上で子ども個々の諸問題に対峙しなくてはならない時がある。とくに造形や図画工作のように個々が表現を行う活動では、子どもが問題を抱えている場合、活動に取り組むよりも言葉や何らかの行動が表れる。例えば、騒いだり乱暴をしたり…それぞれの子どものなりに内面を素直に表しているのだが、指導者が適切に把握して対処出来ているかと言えば、かなり難しい。子どもは不安や問題を私たちとは違った表し方をする。活動を進める上で適切な対処が必要となるが、それらに気づくことなく、むしろ叱ってしまう場合が多いのではないだろうか。これらは成長期の子どもに求められる大切な教育、つまり教科を通しての教育場面であるが、題材の内容を理解させる教育活動ではないので、どのような対処が最善であるのか、指導者誰もが悩む課題である。こうした事例とエピソードを、上田佳世子（美術家・造形教育 1948-2011）は「子どもの絵－見ることと考えること」（伊豆新聞 1990年6月－1992年11月）の連載で、自らの実践 50編を紹介した。後に 56編を加え、「子どもたちとの日々の日記」として『目めめ手てて』（麦秋社 1996年）を刊行した。上田はその前書きで、「大学を出たての頃の若い私は、あれも教えなくては、これを教えなくてはと、盛り沢山の期待を持って子どもたちに接しては疲れていた…（中略）…今ふりかえてみれば、大切な何かに気づかなかったのでしょうか」と回想する。その後「子ども自らが考え、自らの手で作る楽しさを大切に…」する教育活動を行ったと述べている。こうした考えは造形・表現教育の基本であるが、丁寧に「子どもの目や手の奥にある真実の姿・心」に付き合い、エピソードを<日記>と著した例は希少である。上田は子どもの話と言葉を大切にしている。「話すことで話が楽しい方向に広がったり、口に出せなかった不安が解消される場合がある」「子どもの造形活動や表現の過程で、親子問題、友達問題、自分の問題が見え隠れする。子どもたちは社会制度から来るしがらみも享受しながら成長している。子どもの本音は、ふと漏らす言葉にある…」つまり、「何をどのように描きたかったのか、絵を通して子どもと楽しく会話できれば子どもにとって十分な評価となるはず」（朝日新聞社『幼稚園ママ』1997年12月）と述べるように、上田は一貫して「子ども一人ひとりの様子や姿を大切」に向かい合った。上田の<日記>は、その後も教育活動とともに綴られたのだが、残念なことに、続編は未発表の遺稿となった。私は残された原稿用紙やノートに書かれた草稿を整理し始めている。作業は、時間をかけて何度も読み返し、時折拡大鏡と筆順をなぞって確かめるなど、遺跡発掘や美術品修復のように時間を要するが、それによって指導者（上田）と子どもの場面が生き生きとした姿で現れる。遺稿は 150編以上ある。子どもとのエピソードは教

育現場の資料として、また子どもへの眼差は望まれる指導像の示唆となるだろう。そのような意図から不十分な書き起こしであるが、いくつかのエピソード（遺稿）を紹介したい。

## 2. 著者の略歴

上田佳世子（うへだ かよこ）美術家・美術教育；1948年東京生まれ。自由学園初等科、東京家政大学附属高校、多摩美術大学絵画科卒。大学時代は1969年の大学紛争の時代、杉全直、斉藤義重に学び、卒業後、高松次郎ゼミ、かしわらえつとむに学ぶ。1970年以後、激動の現代美術界で作家活動を開始するとともに、子どもの造形教室を主宰し教育活動を開始した。ドキュメンタリー（出来事の場面）を文字で表す試みと実践は1974年、美術家としての個展と作品「破片」（にれの木画廊）で、はとバスツアーのバスガイドの音声を、1975年の個展NARRATON（真木画廊・京都アンデパンダン）では、ポーカーゲームをしている子どもの会話を、原稿用紙に書き起こし映像も加えて場面を再現した。同年のトートロジー展（上田+渡辺恵利世）では、現代美術の観点とパフォーマンスで言葉に着目するなどの積極的な取り組みの実績がある。1984年、85年には、子どもとの教室風景（子どもとのやり取りの場面）をビデオで残している。2011年他界。



写真(1) 1996年から2008年までに書かれたノートと原稿用紙に記された草稿。書き起こしの作業では、明らかな誤記と判読できない箇所を削除するなどの補正作業を行っている。



写真(2) 「破片」会場風景 ほとバスツアーのガイドアナウンスを文字と映像で再現を試みた  
これの木画廊 1974 年



写真 (3 左) トートロジー展でのパフォーマンス 写真 (3 右) 子どものポーカーゲームの状況を文字  
と映像で再現を試みた「NARRATON = 破片」真木画廊 1975 年

### 3. 事例とエピソード

#### 「椅子をカタカタ」 (6 歳)

さやかさんは、椅子をカタカタと音を立ててはニコニコしています。もう 30 分以上繰り返しています。私はさやかさんに「椅子でカタカタ音を立てないでね」と言いました。すると、さやかさんはその日ずっとカタ、カタ、カタとイスを斜めにし、音を出していました。私に

何か伝えたいことがあるのですが、私には伝わりません。さやかさんに静かにしてねと言う代りに、カタ、カタ、カタという音を楽しむことにしました。カタ、カタ、カタ。「あ、いまお腹が空いたと椅子は言ったのね」。すると、さやかさんは「ちがうもんね〜」。次のカタ、カタ、カタを聞き「今日の先生はきれいだな〜って言ったでしょう、ありがとう!」。さやかさんは顔いっぱいに笑みを浮かべ「ちがうもんね〜」カタ、カタ、カタ。そう言うと、何か考えながらカタ、カタ、カタと音を出し始めました。お父さんもお母さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも皆、仕事をしていて忙しいので、さやかちゃんは厨房で椅子に座り一人でカタカタと小さな音を立て、誰かが気づいてくれるのを待っていたのかもしれませんが。さやかさんがカタカタを始めると、私は「あ〜、今ね〜」と素っ頓狂な思いつきを言いました。「ちがうもんね〜」「ちがうもんね〜」と言いながら、だんだん会話が成り立つようになりました。「カタン、カタン」「あ、音がした!」そう言うと、私はさやかさんの側に行きます。「何かご用?」「クレパスを出していい?」「いいですよ!」イスに座ったままニコニコと笑みをうかべているけど、何もしなかったさやかさんが席を立て、自分のクレパスを出し、私のお尻をツンツク指で刺し「画用紙下さい」。だんだん自分から気持ちを伝えるようになりました。早くしなさい!何がしたいの?これが必要なの?それともこっち?とか、私が焦って何かを決めつけたら、きっとさやかさんは何もしない子になっていたかもしれません。不安で自信のない子ども時代は、大人に決めつけられつつも、自分の心を自分で育まなくては成長がないのかもしれませんが。椅子のカタカタ病はまだ治っていませんが、私はカタカタと音がすると、さやかさんの所へ行きます。まるでパブロフの犬のようですが、呼んだら来てくれるという安心感をさやかさんに持ってもらいたいのです。そうすれば大家族の中でも不安も無くなり素敵な女子になります。身体は6歳児としては大きいのですが、心は時々2歳、0歳、3歳と振幅しています。「先生、おっばい持っていてあげようか?」「うーん、重いものね」「じゃあ、私が先生のおっばい持っていてあげる。軽くなった?」「うん、うん、ちょっと軽くなったような気がする、ありがとう」そう言うと満足そうに席に着きます。他の子は、もう人前でそんな事できないので、気づかなかったふりをしてくれます。席に着いたさやかさんは、6歳の就学前の落ち着いた子に見えます。お父さんが弟たちを引き連れ、板前さんの服装で迎えに来ました。さやかさんは、背の大きいお父さんにまつわりついている弟たちの中には入れません。でもニコニコしながら一人で歩いて帰って行きます。お父さんは肩に下の弟を乗せ、右手に真ん中の弟を連れていきます。もう一本お父さんの手があつたらいいのに…。

「私、妹は嫌い」 (小学1年)

「私、妹は嫌い!」安珠ちゃんは、絵をかきながら何度も何度も口に出して言います。「安珠ちゃんは世界で1人しかいないし、妹のくーちゃんも世界に1人しかいないのよ。パパ、ママにとって宝物なのよ」「ちがうわ、いつも私のほうがいっぱい怒られるもん」「じゃあ、今度パパとママに聞いてご覧なさい、私は大切な宝物かどうか?」「ママは、私なんか言うこと聞かないから、いらないって言ったもん」安珠ちゃんは自分に降りかかる矛盾の怒りを淡々と話しています。「でもね、ママは安珠ちゃんをお腹の中で10ヶ月育て、産んで6歳になるまで育てて、これからも育てていくの、大人になるまで。そしてその間、間違っただけをしたら叱り、良いことをしたら褒めて…いろいろ苦労して楽しんで育てるの」「私、早く大

人になりたい」「残念ながら人は20歳位で大人になるの」「私、そんなに待てない」「待てなかったら、どうするの?」「早く大人になる薬飲むもん」「その反対の薬があったら私、飲みたいなあ、あと10歳若くなりたいたいし…」「先生、無理言わないでよ。そんな先生に都合の良い薬無いよ」口を尖らせながら安珠ちゃんは言います。「先生、ママに何度言われたらわかるのって言われたけど、分かっている。でもママが何回も言うから…」。ごめんなさいって言えば良いのに、その一言が安珠ちゃんには言えません。ほおは膨らみ、口はもっと尖って来ます。こんな時お母さんにぎゅうと抱きしめられたら…。ママの顔をちゃんと見なさい、と言われ両腕をしっかりママに握られたら…。安珠ちゃんはもう涙がいっぱい出て、ごめんなさいと言えるのですが、ママは仕事と子育てで、そこまでゆとりがありません。本当は、安珠ちゃんは沢山たくさん、ぎゅうっ、と腕を握りしめられながら叱られたいのです。でもママには時間がないのです。最近の悲劇です。親には理不尽に叱られたいのです。安珠ちゃんの不満はそこにあります。お父さんの仕事を手伝っているお母さんを、ずっと見て来ている安珠ちゃんは、お母さんが忙しいのは十分わかっています。小さい妹に手がかかるのも分かっています。でも、私だけのことで叱られたい安珠ちゃんの希望は通りません。「先生は、妹いる?」「いるわよ」「けんかした?」「う～ん、したかもしれないけど、あまり覚えていないわ」「ふ～ん」と言うと、安珠ちゃんは、「くーは、赤ちゃんが欲しいって言うよ。妹が欲しいんだって」「お母さんは、もう産めないって言うから、私、お父さんに産んでもらえばって言ったら、お父さんも産めないって。でも、くーは、いつもお父さんのお腹さすって、赤ちゃんをお願いしているんだよ」そう言えば、七夕の短冊に「妹が出てきますように」(あん)…を書いてあったのは、くーちゃんの願いを、安珠ちゃんは叶えてあげたいと思ったのでしょうか。家族って素敵です。お迎えに来たお母様に、安珠ちゃんの気持ちを伝えました。お母さんは、反抗してばかりいる安珠ちゃんの気持ちを聞いて、感じるものがいっぱいあったようです。

#### 「ともくん」 (小学1年)

とも君は教室に入って来る時「こんにちは」と言わないで、誰にも気づかれぬように、静かに私の後ろに来ます。「まあ、こんにちは」と言う私の目をそらし、窓の方を見ます。もう一度こんにちはと言いながら顔を見ると、小さな声で「コンニチハ」と蚊の鳴くような声を出します。ゲームの話なら、自分でやったことのないものまで、大きな声で話すのに、普段の会話は、自信が無さそうにモジモジしています。「どうしたの、元気無いじゃない」と、私に言われると「うるせーなー」「その答えは何、ちゃんと挨拶しなさい」私に叱られても平気のまま。「先生、今日何するの?」無表情に、ぶっきらぼうに言います。私に何を言われても、怒ることは無いし感情の起伏もあまり無いのですが、絵を描くのは好きな子です。私と会って、こうしようか、ああしようかと話してから絵をかき始めます。でも、そこまで辿り着くのに膨大な時間がかかります。寄り道をし、そしてまた寄り道をし、なかなか本道に辿り着かないのです。例えば、友達に絵に文句を付けたり、大声で意味無くわめいたり、小さな子を恫喝したり、ありとあらゆる悪さをしてからでないと、自分のことが出来ないのです。それら一つひとつに私に対処し「謝りなさい」「小さい人のお手伝いをしなさい」と言われ、ようやく自分の素直な気持ちになるのです。不思議です。でも私がそれを無視したり、とも君の悪い言葉遣いを止めさせないと、彼は引っ込みがつかなくらい深みにはまり、絵どころではなくなるのです。本当は気が弱く寂しがり屋のとも君を暴走させたら大変なので、

私はブレーキをかけまくります。「ねえ、とも君、先生は他の人にも相手をしたいの、だから5分でいいから静かにして」とお願いしても2分持ちません。仕方ありません、いつも、とも君のペースにはまる私もいけないのかもしれないけれど、どっぷりつき合うしか方法がないのです。とも君が静かな時は、家族と話す時だけです。特にお母さんには、そんな優しいとも君がいるのかと思うほど、うっとり静かになります。「お母さん好き?」「うん」「大切にしくちゃね」「うん」。とも君のお母さんは、職場で男の人と変わらない仕事をしています。素敵なことです。「とも君、女の人が働くというのは大変なことなの。子育てと仕事、食事など、日常生活の全部をお母さんがしているでしょう、分かってよ」「分かっているよ」「だったら、お母さんの前だけ良い子になるのではなく、普段もちゃんとした子になりなさい」「分かっているよ、分かっている」「分かっている! 威張ったり暴言を吐いたり、いじめたりしたら、他の人からお母さんの耳に、とも君の普段の生活ぶりが伝わり悲しい思いをするよ」「……」「普段からお母さんに喜ばれることをしなさい」「学校ではちゃんとやっってるよ!」「本当かな～、時々地が出ていないの? 嘘はいつかばれますよ」「これからちゃんとするよ～」口を尖らせながら作業に入りますが、2分もたたないうちに隣の席の拓海君の頭を叩いています。もうっ…と怒る私に、もうしないよ、と笑ってみせます。こんなにややこしい子がいます。お母さん助けて下さい。とことんお母さんに叱られたいのですが、その前に甘えたいのです。でもその前に、いつも他人行儀になってしまうのです。男の子の付き合いは難しい。

「あなたのお名前は?」 (小学2年)

さえさんは、あの人、この人、そっちの人、向こうの人…と、すべて〇〇の人で名前を片付けてしまいます。私が「人には名前があります。お名前を覚えましょう」「私、知らないもの」「尋ねてみたら? でも、何度も尋ねないで自分で覚えるのよ」「うん」手を自分の体の脇辺りをこすりながら助走をしています。極度の緊張癖のあるさえさんに、私は「困った時とか緊張しそうな時、自分の体のどこかを10回触ると落ち付くから」と言ったのを思い出したのかな。さえさんは、アトリエに来て3年以上になるのに、人の名前を覚え不了のです。いいえ、違います。覚えているのだけど声が出ないのです。名前を呼ぶのが恥ずかしいのかも知れません。私やもう一人の先生とはお話するけれど、子ども同士の話はありません。狭い教室ですれ違いの際に、ぶつかっても強引に通ってしまうので、「あいつは…」という顔で見られています。「さえちゃん、そんな時ひと言、失礼します」とか言わなきゃ。「ああ、また忘れちゃったよ」とニコニコしながら言います。でも同年輩の子たちは「あいつはいつもそうだ」という気持ちが残り、さえさんに優しくないのです。私はさえさんに、おはよう、こんにちば、さようなら、失礼、何をしているの、といくつかの言葉が緊張しないで出るように、体の一部を触っても良いから言おう、とイメージするように言い聞かせています。アトリエのケンカっ早い子や、トラブルメーカーは、共通することがあります。〈人の話を最後まで聞けない〉〈正しく相手に伝えられない〉この2つです。私のようなおばさんも、人の話を最後まで聞くのは苦痛です。つい端折って言葉を挟みたくくなります。私は、子どもからこの大切さを学びました。子どもの話し方は秩序が無かったり、説明不足で意味が分からなかったりすることは山ほどあります。でも聞かないと相手の心はわかりません。

## 「尋ね魔のまなみさん」 (小学1年)

夏休みの宿題の絵は「自分で描きたいものを、お話をするように描きましょう」と言う私に、まなみさんは髪型入れずに「何を？」「だから、あなたの描きたい絵をどうぞ。夏休みをどう過ごしたのか、毎日の生活を思い出してね」と言うと、私に「何を？」とすぐに尋ねます。まなみさんに少し考えるという習慣があると良いのですが、仕方ありません。「先日私に、サファリパークへ家族で出かけたという話をしてくれてたでしょう、その日のことを思い出してみたら？」まなみさんはしばらく思案すると、自信がないのか、「ライオンかいてもいい？」「キリンをかいてもいい？」「弟をかいてもいい？」自分のしたいことの一つひとつを、まず私に尋ねます。私は、まなみさんに強く言ったこともないし、不安を与えることも言ったつもりもありません。まなみさんの不安感は何なのでしょう。自分のしようと思ったことの全てに、「いいの？」「いい？」と確かめます。「いいですとも！」「見ていてあげるから、やってみてご覧なさい」と私は言い続けなくてはなりません。特に私が他のお母さんと話したり部屋から出ると、追いかけて来て「黄色使っても良い？」と尋ねます。「どうしたの？いいわよ」と答えると、1分も経たないうちに「色を塗っていい？」「いいわよ」と答えますが、私が不安になります。なぜこんなに私に聞きに来るのかしら？ 私は、まなみさんの不安をどうやって取り除いてあげられるのか考えてしまいます。まなみさんに自信を持ってとか、頑張ってみて一人でやりなさいとは言えないので、一つひとつ答えています。皆が大笑いしている時も、まなみさんの顔は笑っていません。まなみさんは、お父さんとお母さんを絵に一度もかきません。家族は弟のみかきます。「この時、お母さんは何をしていたの？」「たばこ吸ってた」「この時、お父さんは何してたの？」「運転してた」私がまなみさんにいろいろ尋ねると、まなみさんは穏やかな顔をして状況を説明してくれます。でも私が他の子と話を夢中になったり、用事を始めると「鉛筆はどこなの？」「消しゴムがない！」と言いながら席を離れてしまいます。「ほら、目の前にあるじゃない。ちょっと手を伸ばせば消しゴムもここにあるわよ。」と言う私に、「山をかいていい？」と尋ねます。私はまなみさんのそんな状態に参る時があります。でも、なるべく心を落ち着けて、まなみさんの視野が狭くなったら側に行き、質問魔になってあげます。「素敵な空はどんなだったの？」「丘はあったの？」「水筒の飲み物はなあに？」こんなやり取りを続けて行くうちに、まなみさんのパニック状態を拭い、私は他の子どもと話が出来ます。私も子どもの頃、親や友達以外の人と話をするのは苦手でした。小学生の頃、誰とも話さない日がよくありました。まなみさんの不安は私の子どもの頃の不安と違うのでしょうかけれど、人とコミュニケーションをするということは同じものです。

## 「2年生の親父」 (小学2年)

町工場の親父さんが仕事の合間に、スチール椅子に座って一休みして世間話をするような格好で、こうが君は画用紙に背を向けて「オレサァ〜、アトリエは汚いと思うさ。みんな色をごちゃごちゃ使ってさ〜」私は、アトリエは作業をするところだから、汚しても良いんだよと言うと、目を白黒させ「本当？ 机から絵の具がはみ出してもいいのかよ！」「先生は机を汚して怒ったことある？」「ないけどさ、オレこんな所で寝れねえなあ」「当たり前でしょう、ここは絵をかいたり工作をしたりする場所ですよ」「そりゃそうだけど、針金とか紐とか絵の具がいっぱいあってさ…」童顔の小ぶりの体格のこうが君は、膝を横に開くように組

み、筆をくるくるまわしながら話しています。私も他の子の世話で忙しくなって、相手をしていないと、通る人に話しかけています。「オレは、緑、茶色と黒があればいいのさ！」「どうして？」と尋ねる子に、私は「こうが君はクワガタに木しかかかない省エネ作家だもんね！」と言うと「そうそう、でもオレきょう、花火かいっちゃったさ」「珍しい、どれどれ？」と、こうが君の絵を見ると、丸の形のまわりにカタカナのハの字のような緑色の模様があります。「これ、もしかして打ち上げ花火？」という私に、「そうそう、先生みた？（きのうの花火大会）、きれいだったなあ～」「へえ、いいもの観たね、だったらこんな色、例えば黄とか赤とか青とか」言いながら私は、省エネ作家のパレットに色を少しずつ出しました。「ほう、きれいじゃん」「だったら、使ってみたら？」そう促された省エネ作家は、丸筆にたっぷりの水を含ませ、絵の具の入ったパレットに、みみっちいほど慎重に筆を入れました。「周りに花火の模様を入れてみたら？」気持ちの勢いはあるのですが、画用紙に乗せる時、ちびり、ちびりと用心深く描いています。「あ～、グッド。花火っぽいね、いいね」と言う私とは反対に、自信なさげに筆を動かしています。こうが君は、言葉はとても達者ですが、絵には自信がないのか別人のようです。かきあげると、「きれいじゃん」と小さな声で一言。いつもの親父風の「あ～、オレやってられねえ～」という風の言葉ではなくなっています。些細なことで、色に気づくなんて最高の出会いです。「今年は良い花火を観たんですね。」と言う私に、「ま～な」と言って、パレットの色を混ぜ、筆洗に筆を入れてガシャガシャとかき混ぜると、「すげー色できた」と言って喜んでいます。「先生これ何の色？」「う～ん、これだけ黒っぽいとね、でも色をたくさん混ぜると、こんな色が出来たって分かっただけでもいいよね」「こんな汚ねえ色、家では絶対ありえない！」と唸りながら、筆とパレットを片付けに行きました。いつもきれいな所にいるより、汚れ、しみ、濁りなどにも色があることを知ってくれたかな、こうが君。（\*）こうが君は程度の軽い色覚異常があります。色の違いがよくわからないことを不安に思っています。

「お母さん」 （小学5年）

ある夏の初め、それぞれに絵をかいていました。テーマに困っていた寛之君が「先生！夏と言えば？」「水」「違うな…もう一度、夏と言えば？」「スイカ！」「スイカか…、でも俺かけないからなあ…」とブツブツ言いながら考えています。「コンパスある？」寛之君はスイカの丸さを描くには、コンパスしかないと強く言います。私は「紐を輪にして鉛筆二本で自由な円がかけますよ」と言う、寛之君の創作意欲に火がつかしました。半円でスイカを描き、少しずらしてまた半円をかきました「これはじっちゃんのはげ頭」。じっちゃんの顔はどうするの？「うん、元気な顔を…。」「絵の具も使ってみましょうか？」と、声をかけると「うん」と一言。「色は、二色混ぜてひとつの色にするときれいですよ」と話しかけると「俺、色わかんないし…」（\*2）「いいのよ、これと思う色を使ってごらんさい」。じっちゃんのはげ頭…と何度か言うと、次に頭に一本の毛を生やしました。「これから毛がたくさん生えるのさ。」そう言うと、恥ずかしそうに筆を止め、片付けの準備に入りました。

絵の楽しさ、言葉の軽やかさに比べ、何か沈みがちな寛之君、毛を一本生やした線を力一杯鉛筆でなぞりました。私に読めない行為だったので記憶に留めました。そして数日後、他の先生から寛之君のお母さんが、抗がん剤で髪の毛が抜けているという話を耳にし、寛之君のかいた絵を思い出しました。人なんてかく子ではないし、まして食べ物を描く子ではないので、スイカをかいたのも、はげ頭のじっちゃんも不思議な気持ちにさせられました。母を

思い、絶対に口にすることのないストレスを絵にかいたのでしょうか。寛之君の気持ちは言葉にすると、案外ストレートです。おどけた表現でごまかしてしまうので分かりにくいのです。何か言いたいのでしょうか、10歳の少年は、言わないことで必死に頑張っています。そんな時、他人は見えてあげられないように思います。声をかけ、言葉に耳を傾け、描かれたものに共感してあげることしかできません。50歳、60歳で父や母を失う辛さも10歳の辛さも同じように、人を試練の道に立たせませす。寛之君が家族をつくり安住の地を見つけられるまで私は生きられるだろうか、考えるときりがありません。「父さんは寝てばかりさ、オレつまんない。あぁ、でも本当はそればっかじゃないよ」。寛之君の言葉は、<母さん病気で寝てばかり、でもオレは大丈夫さ。母さんが大変なんだから…>という意味なのです。そして、母さんのことを一番に心配して思っているだけさ、オレは同情されたくないよ、平気さ、と言っているのです。「おじさんがバスケのコーチだから、オレ練習に行かなきゃならないさ…」。私は、心の中でおじさんにも気を遣っているのだなと思い、寛之君の大人びた矛盾だらけの表現の謎解きをしています。どんなに背伸びをしても、小柄な寛之君がバスケットボールを好きとは思えず、周囲のことを考え、祖母や伯父さんに気を遣っている姿が目につかびます。でも、この試練も大切なことだと私は思います。何も言わずに「良く来たね～」と言う私に、「オレはどっちでもいいのだけれど、ぼーちゃんが行けて」。お母さんになるべく普段通りに寛之君を過ごさせようと考え、おばあさんが背中をポンと押してくれるのでしょうか。本当は母さんの側にずっと居たいのです。（\*2）寛之君は色覚に異常があります。色の違いがよくわからないことを不安に思っています。

#### 「鉛筆削り」 （小学5年）

私がポリポリ、サクサクと鉛筆と色鉛筆を削っていると、5年生のみくちゃんがずっとその様子を見ていて「先生、私のためなら削らなくてもいいよ」。飾り気のない少年のようなみくさんはニヤリともしません。「アトリエの始まる前は一応削ってるんだけど…」「そう、私、電気で削ったの好き」「そう、私は何年も前から削っているけど、ちっとも上手になれない」「うん、下手」。嫌味でももなくサラリと言ったのけた。水筒に入れて来た麦茶をキャップのコップに注ぐと、飲み干してその少年、いや、みくちゃんは教室の外に水筒を置きに出た。「ねえ先生」そう言うと、椅子を引き寄せ「機械も良いもんだよ、あのツルツとした木と芯がね」「あぁ、その感触忘れていた。円すいのあの形きれいだよね～」「そう。ゴツゴツ、ギザギザした先生のも良いけど」「そうだね、あれはきれいだ」そう言う私にみくさんは、おぼつかない手でカッターナイフを持ち、私の真似をして鉛筆を削り失敗した。初めの刃を深く入れすぎて削り、形を整えようとした時ポキリと折れた。みくさんは、カッターナイフと鉛筆をテーブルに置いた。私が「もう一回やっごらんない、初めは浅く薄く木の部分を削って少しずつ」「このカッターナイフ、削りやすいね」みくさんは、何度も同じことを繰り返しているうちに上手になってしまった。「あ～あ、私の出番がだんだんなくなる…」と言う私に、「そんなこと無いよ…」その次が聞きたいけれど、なかなか言ってくれない。「さ～と、三本削ったからこれ使おう」「…どうぞ」ご苦労様と小さい声でみくさんに言いました。

#### 4. 引用文献

「子どもの絵－みることと考えること」(伊豆新聞 1990年－1992年) 伊豆新聞社

「目めめ手てて」上田佳世子 麦秋社 1996年

「幼稚園ママ」朝日新聞社 1997年